［ちくほう地域研究］

「語り、伝える、戦争の話」講演会より

筑豊地域研究会
青山　英子

平成24年8月18日、嘉麻市教育委員会主催の平和イベント「語り、伝える、戦争の話」が碓井平和祈念館で開催された。碓井平和祈念館では、開館以来、庶民と戦争をテーマに展示が行われている。日米開戦から70年を越え、終戦からも70年近くを経た現在、戦争体験者から直接その体験談を聞く機会は急速に失われつつある。戦争体験は、人によっては口にするのもはばかられる辛い体験であるが、一方では過酷な体験ゆえに語り伝える義務があると考える人もあり、歳月と時代の変化が少しずつ重い口を開かせてきた。ごく普通の人達が戦争によってどのような体験を強いられてきたかを記憶に留め、未来の子孫に受け継いでいくことは様々な意味で、今、私たちが果たすべき大切な役割ではないかと思われる。

この日の講演会では、嘉麻市と飯塚市に住む三人の男性がそれぞれの戦争体験を披露した（写真1）。

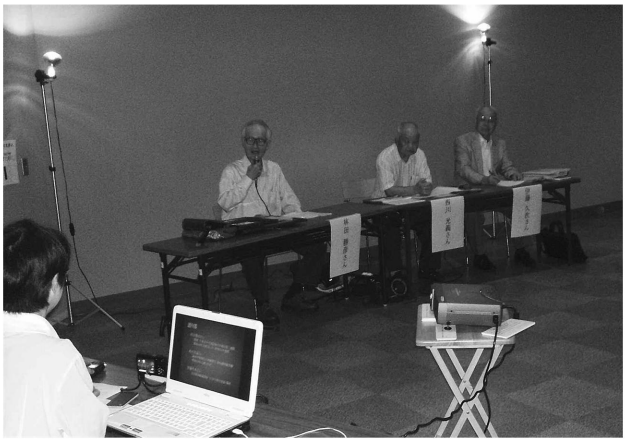


写真1　講演会の話者　林田、西川、伊藤の三氏（平成24年）

林田勝彦　陸軍　久留米中支派遣独立山砲兵第二連隊

大正9年生まれ。日中戦争（注1）の最中、太平洋戦争勃発前の昭和16年、徴兵により陸軍の久留米中支派遣独立山砲兵第二連隊に配属され、中国の杭州で現地入隊した。訓練期間は三ヶ月、警備地に教育隊だけが残り、実戦を前にしての厳しい訓練が行われた。

林田は当時を、「ちょっと、言葉では言い表せないような、朝から晩まで、気合を入れられました。三ヶ月の間に実戦の役に立つように、鍛え方がもう想像の出来ない状況の中で、日支事変（注2）の最中でしたから余計に厳しかったですね。内務班では、私的制裁と言ってましたけど、もうやられる一方でした。ぶん殴られる訳ですね、みんな並べて。そういう風な教育でした。」と振り返った。三ヶ月で一人前の兵に鍛え上げるため、火の出るような訓練だったという。

山砲は、軽量小型の火砲で、分解して運搬できるため山岳地帯や不整地などでも機動力を発揮できる野戦砲であったが、射程距離が短いため、敵前に接近しての射撃となった。その為、山砲隊は常に歩兵とともに行動し、その先鋒を任された。

林田が配属された独立山砲兵第二連隊では九四式山砲を使っていた（写真2）。山砲を車輪、ヨウ架、前脚、後脚、砲身と分解し、6頭の馬に駄載して進軍し、陣地占領後、部品を結合し歩兵の前

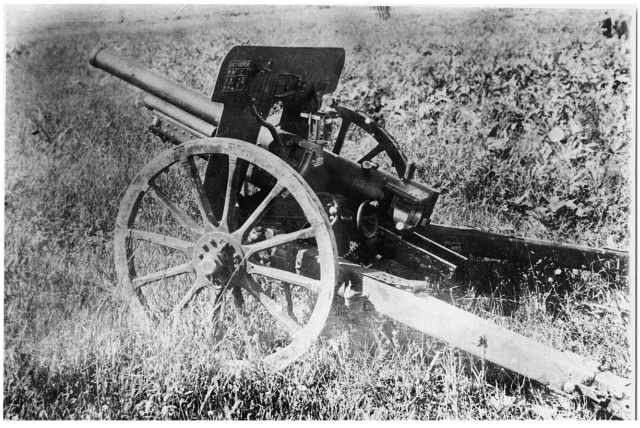


写真2　九四式山砲

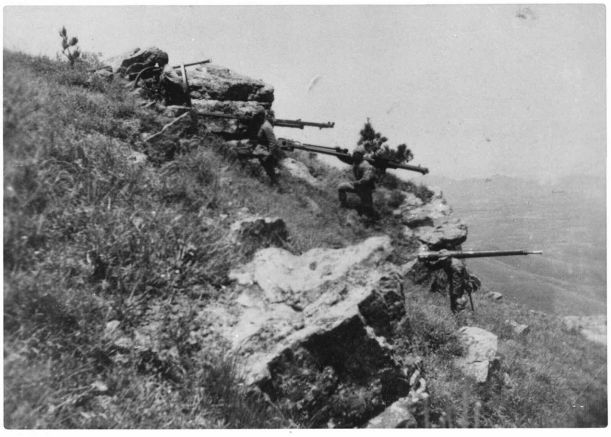


写真３　九四式山砲の配備状況

に出て射撃した（写真３）。

「直接の歩兵に協力して射撃できる火砲でありますので、５００メートル位の近距離で撃つ訳です。目標に間違いなく命中いたします。これこそ百発百中というぐらいの命中率でした。初弾を打って、２発目はトーチカ（注３）なんかも爆砕しておりましたので、歩兵にとっては、神様のような存在でしたでしょうね。それだけ、歩兵の犠牲者がありませんので。その代わり山砲兵は、後でいう特攻隊みたいなもので、もう命は捨てたものでした。」

全作戦が一番前での戦いだったという。

林田は訓練中に生涯にわたって影響を受けたという教官に出会った。

「軍人でないような、ご立派な、神様と私は尊敬して申し上げております」とまでいう益田豊中尉である。

「井伊直弼の城下町である彦根の明性寺のご出身でありました。これこそもう凛とした、そして勇ましくて情けのあるお方でございました。士官学校以上の教育を毎日したといわれるように、それこそものすごい教育を受けました。それから中隊長になられましたので、私たちの一番いい親というようなお方でした。軍人の中でも優しさというのが非常に深い方でございました。この隊長の元ならいつ死んでもいいと、そういう風な覚悟でおりましたので、戦闘中も恐ろしいものが無いという感じで、皆戦いました。隊長が陣頭指揮で、射撃されても皆一緒にいるような状態でした。」と言い切る。

親とまで慕った益田隊長は昭和18年、河伏山付近の激戦で陣頭指揮を執る中、敵弾に倒れ戦死した。23歳であった。林田との年齢差はわずかである。その奮闘を伝える当時の陸軍の新聞には「敵前五十米（メートル）で敵陣爆砕」と書かれている（資料１）。現地で隊長の慰霊碑を建立したが、76名いた教え子の数はその時には半数になっていたという（写真４）。

林田の独立山砲兵第二連隊は、常に最前線で闘ってきた。当時は勝ち戦ばかりが報道されていたが、負け戦の時は哀れだったという。

「第二次長沙作戦、それから20年の４月から行動を起こした芷江作戦。敵飛行場の占拠に行きまして、その時も１０００メートル級の山をまた越え、また越え、敵地に入りました。そこで、敵の戦術にまんまとはまりまして、それこそもう玉砕状態

銃砲聲殷々山野を壓す
凄烈!!敵前五十米で敵陣爆砕
豪勇益田豊中尉奮戰記

資料１　益田隊長の奮戦を伝える陸軍の新聞（昭和18年）

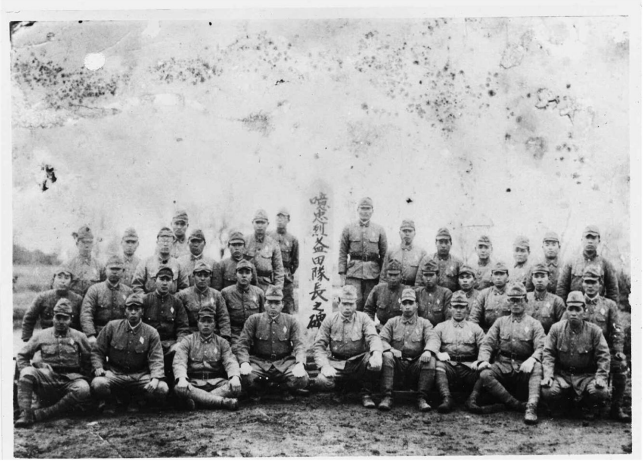


写真４　益田豊隊長の慰霊碑と独立山砲兵第二連隊隊員（昭和18年）

になりましたけども、それを耐えて、血路を開いて脱出。人馬共に次々に沢山やられましたけども、どうやら切り抜けました。いつも勝った、勝ったというような状態ではございませんでした。中国軍も歴戦の部隊でしたので逆転しまして、昔の中国の兵隊たちが装備も米式化された精強なものになっておりました。」

林田は、徴兵されて以来、中支（中国中部）で終戦まで闘い続けた。入隊からしばらくの間は内地からの慰問文や慰問品も届けられ、手紙などは何度も読み返し自分の肌身につけて感じていたという。しかし、大東亜戦争開戦以降は手紙は届かなくなった（注４）。

「もう内地との連絡も全然取れませんでした。重慶作戦も始まりましたので、東奔西走で、東に行く、西に行く、それから北から南からというような状況でした。ただ自分に起こる当面の作戦だけで、外の状況は全然わかりませんでした。まあ負けているなということは大体わかりましたけど、あくまでも勇敢に戦うだけで、自分の持ち場を、しっかりと。まあ勇ましいというのじゃないで、若かったですからね。戦いに望んで自分はいつ死んでもいいというような気持ちにはなっておりました。」

敗色が濃くなり、終戦に向かっていた当時のことを振り返る。

林田は男ばかり四人兄弟の三男。兄弟全員が兵隊に行き、次兄と弟が戦死した。戦地で肌身離さず身につけていたのが母の写真だった（写真５）。

「母が一番でございましたので。雨にも風の日も、高温、それから作戦中は合羽着とるだけですから、雨通りますし、湿気でこんな風にカビが生えております。兵隊さんは死ぬときには、皆、『おっかさん』と言って、最後に一言いうて死にますので、みんな同じ気持ちじゃなかったかなと思います。お父さんと言う人は誰もおりませんでした。

天皇陛下万歳とか、聞いたことありません。あれは嘘だと思います。天皇陛下万歳なんて雲の上の人を考える余地はございませんでしょう。今でも思いますけども、天皇陛下が中心でしたけども。」

写真５　林田が肌身離さず持っていた母の写真

そして、軍人勅諭を朗々と詠じた。

「一（ひとつ）、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。

一（ひとつ）、軍人は礼儀を正しくすべし。

一（ひとつ）、軍人は武勇を尚ぶべし。

一（ひとつ）、軍人は信義を重んずべし。

一（ひとつ）、軍人は質素を旨とすべし。

五箇条のご誓文で軍人は教育されましたけども、天皇陛下万歳という声は、私は聞いたことはありません。ただ『おっかさん』だけは皆言います。母親というものは身に沁みて、ちっさい時から可愛がってもらったと、皆子どもに返って一声だけですよ。『おっかさん』と最後の言葉。それは何回も聞きました。」

母に対する思いを語る言葉のひとつひとつに亡き戦友への思いが込められているように聞こえた。林田が終戦を知ったのは、８月15日を一週間も過ぎた頃だったという。

「聞いたときがまだ戦闘中でございました。まだ戦っている真っ最中でした。そしてその知らせが本当のことかどうか信じられませんでした。確かに、もう逆転した形で、米軍と米軍に教育された中国軍が最強の部隊になっておりました。それに立ち向かっておりましたので、敗戦の知らせを聞いたのが一週間後でしたね。戦争に負けたと、信じられませんでした。まだ戦闘中でしたから。

今まで銃撃していた米空軍が全然撃たなくなり

ましたね。不思議なことやなーとか言いながら、そういう状況でございました。末端の前線までは連絡はつかなかったんだろうと思います。

本当のことを聞いた時はみんな男泣きに泣きました。若かったからですね、まだ、25でしたから。必勝の信念ということを叩きこまれておりましたから。日本は必ず勝つ、そういう戦いでした。負けるということは毛頭考えておりませんでした。私どもの独立山砲兵第二連隊というのは杭州湾上陸からの精強な部隊でしたので、感状を13本もらうような部隊でした。特攻隊みたいに、前に出て命をいつも投げ出しておりますので、死ぬことは覚悟の兵隊達でした。だから、負けるということは信じておりませんでした。」

林田は終戦の翌年、昭和21年に復員した。

最後に、林田は平和な時代に何を思うか、次のように話を結んだ。

「今現在ですね、日本はどんな戦争をしても負ける。ハッキリ、私、言うことができます。戦いに勝つ方法は、戦争をしないこと。それだけだと思います。闘争心は皆ありますけども、それを抑えて、今日ある平和を。それが３００余万の犠牲者を出した戦争に対する答えではないかと思います。ただ戦争をしないこと、平和であること。そういうことを私は戦争生き残りの老兵として申しあげます。」

今でも士官学校以上の教育を受けたという自負を持っているという92歳の長身の老兵は胸を張って言いきった。

西川光義　海軍　甲種飛行予科練習生　松山海軍航空隊

昭和３年生まれ。昭和18年旧制中学校３年時、海軍に志願し、翌19年甲種飛行予科練習生として松山海軍航空隊に入隊した。西川は15歳で海軍に志願した当時の心境を次のように語った。

「あの時はですね、もう男として零戦に乗るちゅうのは最高の夢やったんですね。もうこれ以上のことは無いと、何とかして零戦に乗りたい、ただそればっかりですね。それでおふくろを守りたいという気持ちだけでございます。

昔は今の中学２年生までが義務教育だったんですね。それを終わって一年間して、つまり今で言うたら中学３年生を卒業したその年の３月31日に入隊したんです。15歳の終わり頃入隊したんですね（写真６）。ただ零戦に乗りたいという気持ちの強さから予科練に行った訳です。零戦に乗って、敵の航空母艦に体当たり出来たら、これまた最高ということですね。ただ、それしか頭に無いとです。訓練はものすごく厳しかったけど、その苦しさに耐えて頑張りきったとも、やっぱ夢があったからですよね。戦闘機に乗りたい、零戦に乗りたいちゅう夢があったから。」

写真６　海軍甲種飛行予科練習生
正装の西川（15歳）

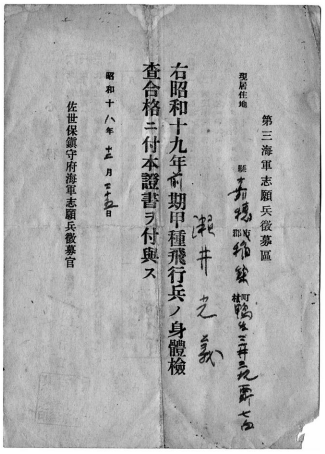
当時の軍国少年は、自らの命を省みることもなく敵艦に体当たりして散る英雄的行為に何よりもの憧れを抱いていた。

西川が生まれた三年後には陸軍による満洲事変が勃発、その後この国は国家を挙げて戦争に突き進んで行った。西川が育った昭和初期は軍靴の音が徐々に強くなっていったそんな時代だった。

旧姓瀬井光義と記された資料を見れば、昭和18年11月14日に志願兵としての適性を認める証書が付与され、翌月、12月９日付で乙種飛行兵の二次検査の出頭通達書が出され、15日出頭、三日間の検査の後、25日に甲種飛行兵の身体検査合格の証書が付与されている（資料２）。こうして西川は昭和19年３月、同郷の少年兵たちと鴨生駅から大勢の見送りを受けて出征していった。

「大日本国防婦人会というたすきをかけて、鴨生駅から百何十人の奥さん方が日の丸の旗を持って、私達を送ってくれました。私達は15歳が三人、16歳が一人、合計四人が一緒に行きました。」

出征の日は晴れがましい気持ちに沸き立ち、汽車に乗ってはじめて両親への挨拶を忘れていたこ



第三海軍志願兵徴募區
現住住地　縣　郡　瀬井之義
右昭和十九年前期甲種飛行兵ノ身體檢査合格ニ付本證書ヲ付與ス
昭和十八年十二月二十五日
佐世保鎮守府海軍志願兵徴募官

資料２　海軍志願兵甲種飛行兵
身体検査合格証（昭和18年）

とに気付いたという。

入隊後の訓練は厳しいものだった。バッターといって野球のバットで尻を叩かれる集団制裁もあった。

「野球のバッターで、尻を14回叩かれた回数まで覚えております。バッターで叩かれたらものすごい痛いですよ。」と西川は振り返る。

松山海軍航空隊は飛行場の横に2階建ての予科練の兵舎があった。訓練はそこの運動場で行われた。マット運動や平行棒、グライダーの滑空訓練、手旗信号、モールス信号など飛行兵となるための訓練のほか、小銃の射撃訓練、陸戦といった陸軍のような訓練もあった(写真7)。中でも西川を驚かせたのは水泳の訓練だった。

「水泳ですね、私がビックリしたのは。ものすごい高い飛び込み台があるんですよ。そっから海に飛び込むとですね。わたしゃ、ああいうとを見たこともない、したこともないとに、飛び込みを一列に並んでやられる。飛び込みきらんとかそげんことは言われんとです。とにかく順番やからですね。しゃにむに飛び込まにゃいかん。それから遠泳、海で泳ぐとも一列に並んで泳がせられるとですね。泳ぎきらんちゅうことは通用しないんです。」

15歳まで海は一度しか見たことがなかったという山間地出身の西川には、大きな試練だったようである。

訓練中に米軍の空襲を受け、訓練生が犠牲になったこともあった。

「訓練をしておる間にB29の爆撃を受けたんです。あら凄いですね、海岸べたから爆弾が二列に並んでダーッとこっちに落ちてくるからですね。私は穴のある所に塞いでおりましたが、あん時予科練が相当死んじょるですね。グラマン、アメリカの艦載機ですね。航空母艦から来たやつが、機関銃で撃ちました。そん時も見よったらですね、戦闘機がダーっと撃ちながら、搭乗員が見ゆっとです。もう鉄砲持っちょったら俺も撃っちゃるとにちゅうぐらいのそんな距離ですよ。日本なめられちょったですね。こっちゃ、なーんも持たんとですよ。」

戦争末期の海軍は、戦闘機も艦船も大量に失い、闘う術を失いつつあった。終戦間際になると訓練は米軍の本土上陸を想定したものに変っていった。

「そういうようなこと（空襲）があって、もう松山海軍航空隊には居られんということで、四国、愛媛県の南の方の海岸に移動したとです。そこには潜水艦がおって、豊後水道を敵の船が来た時に出て行って戦うということで、潜水艦の護衛に我々は行ったんですよ。その時に、ひょっとしたら敵の戦車が上がってくるかも解らんという予想で、棒地雷ちゅうて、棒のような地雷を持って穴の中に入っておって、敵の戦車が来たらそれをキャタピラの下に敷くんです。そしたら破裂してキャタピラが切れる。キャタピラが切れたら戦車が動かんと。その代わり自分も死ぬというような訓練に変わってきたんです。

飛行機に乗るちゅうても飛行機は無い、船に乗って外国にちゅうても船は無い。だからいわゆる陸戦隊といいますかね、海軍が陸軍の真似をして戦う。陸戦隊というものになって敵の戦車をやっつける、そういう訓練をしたというのが実情です。」

終戦前の日本軍は乏しい武器を補うためにさまざまな特攻という手段に打って出た。

「私は航飛の十四期です。十三期、十二期、つまり、私達よか1年か2年先に行った人が飛行機に乗られんで、人間魚雷『回転』に乗って、訓練中に死ぬ人も多かったんです。『回転』は人間魚雷やから一人乗りですね。潜水艦に乗せられてある程度行って敵の船がおったらそこから出発して、敵の船に体当りで爆発するという。そういうものにも私達は乗れなかったというのが現状です。

特攻はですね、戦闘機で、敵に体当たりするというのが、神風特攻で一番有名ですね。それから人間魚雷『回転』ですね、これも非常に有名です。その次に人間爆弾『桜花』。これは一式陸攻というて、大きな飛行機の腹に積んじょって、プロペラ

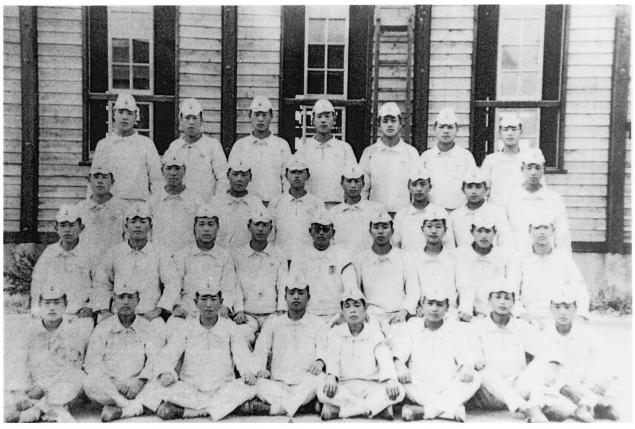


写真7　松山海軍航空隊　甲種飛行予科練習生35分隊
第1班　（昭和19年）

やら無いとです。ただ爆弾に羽がついちょるだけですね。上から切り離されて操縦して船に当たる。そして爆発させるとです。その他、海の中に沈んで敵の船が来たら下から爆雷で、船の底に当てる。そして爆破させるというような特攻もあります。伏龍というんですけれども。それから高速艇に乗って体当たりするとかですね。終戦前は自分と敵を交換する、自分一人が敵の何十人かの命と交換するという方法に変わってしまいましたね。」

『七つ釦は　桜に錨』と軍歌にも歌われた予科練の制服にあこがれ、零戦に乗って敵艦に体当たりすることを最高の幸せと信じて入隊した少年兵を待っていたのは、地雷を持って敵戦車の動きを封鎖するという自暴自棄的な戦法に真剣に取り組むような現実だった。

「我々が入隊する時はもう飛行機、無かったんですよねー、今考えたら。それをいかにも乗れるような格好して採用だけはしたんですね。騙されたちゃ騙されたげなもんです。しかし、その訓練によって、精神力が非常に強くなったですね。それが復員してから後、自分を助けてくれたということは思っております。だから予科練の訓練はよかったと、私の生涯にとって、そういう風に思っております。」

愛媛県南岸の警備をしていた西川は、終戦の日は何も知らされないままだった。

「私達は愛媛県の南の方のリアス式海岸の警備でおったんですよね。そしたら、『船に乗れー』ちゅうことで船に乗って、そして、宇和島さ行って、それからまた九州の方に行く小船に乗せられて、『あら、なんか帰るとか』げな調子で。戦争負けたからとかいうような話は無かったですね。それで、仕官なんかも一緒に四国から乗ったきですね、『あー、こら戦争終わったんやねー』ということを感じただけで、戦争負けたからどうのこうのちゅう話は聞きませんでした。ただもう、『はい、船に乗れー』『はい、九州に行け』ちげなもんで。

それから後藤寺を通って汽車で帰って来たんですが、行きがけは何百人ものご婦人方から万歳万歳て送られた。帰って来た時は、だーれも迎えに来ちゃらんでですねー。もうそれに私は驚いたですねー。私は赤坂駅、今の下鴨生駅、あそこで降りて、大きな荷物、衣類を入れる大きな袋を担いで、軍刀を持ってテクテク歩いて家まで帰って。『まあ行くときはあげーんいっぱいおったとに、帰るときはだーれもおらんで淋しいもんやねー』と思って、それだけで、戦争負けたとかなんとか感じんやったですね、あんまり。」

昭和20年こうして西川は郷里稲築町に帰って来た。

西川は出征時に2歳年上の姉から封印した封筒を渡されていた。裏面には「特攻隊として出動の時明なさい。それまで絶対あけてはなりません。体に充分気をつけなさいよ。体当たりして死ぬも病にて倒るな」と記されていた。特攻隊として出撃の機会のないまま復員した西川は、帰郷後その封を切った。

「私が予科練に行く15歳の時、姉は18歳やった訳ですね。その姉が血染めの日の丸と必殺と書いた鉢巻きを封筒の中に入れて、裏に「これ出撃する時に持って行きなさい」ということが書いてあった訳です（写真8）。

結局私は特攻隊に行かなかったんで、封筒は開けんで、帰って来て、何が入っちょるやろうかと思うて開けて見てみたら、これが入っちょったとです。そんで大事にしてですね、無うなったらいかんと思うて、平和祈念館に寄付をしている訳でございます。」

血染めの日の丸と封筒は、七つ釦の制服とともに嘉麻市碓井平和祈念館に展示されている。

85歳になる西川は、今の15歳、中学3年生の子どもたちにかつての15歳だった自分の体験を伝えたいと語りはじめている。

伊藤久次　終戦時、山田中学校1年生

昭和8年生まれ。陸軍将校だった父、登は、昭和12年、杭州湾上陸作戦に参加、13年に負傷のため小倉陸軍病院に入院、久留米病院に転院後、帰郷療養となった。教師でもある父は上山田小学校

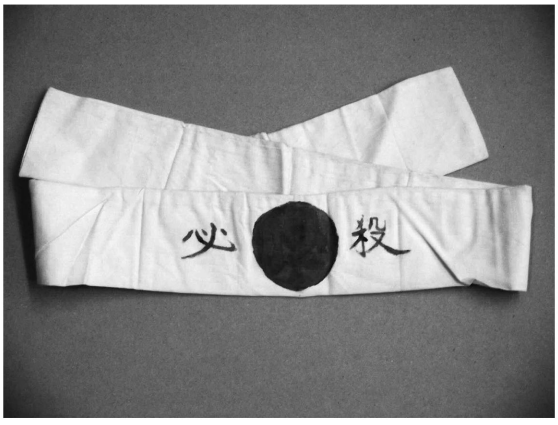


写真８　西川が姉から贈られた血染めの鉢巻き（昭和19年）

の教諭、中学校の配属将校として内地に配属されていた。父は教え子を家に招いて指導するほどの熱心な先生だった（写真９）。

「親父が、上山田小学校におったときは、嘉穂中学校の受験というのがあったものですから、受験をする人達を、僕の家まで連れてきて、夜勉強させて泊り込みでしておりました。親父、熱心でしたから。」

祖父は碓井村の村長を務めた人で酒造業を家業としていた。昭和19年には、酒の製造はできなくなったという。父が久留米野砲第二四連隊配属で家族が久留米で暮した時も長男の伊藤だけは祖父と碓井に残された。父に出征の命が下ったのは昭和19年のことだった。

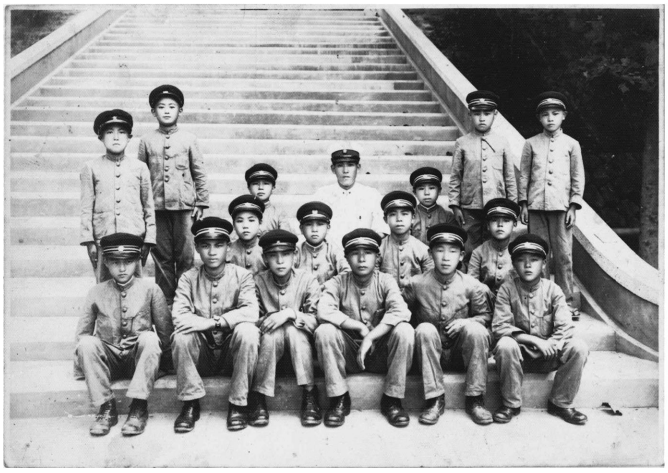


写真９　伊藤登と上山田小学校の教え子たち

「今から出て行くから、戦地に行くからということで電話があって、僕たちが行ったら、ちょうど片一方電気を消した列車とすれ違った時が、久留米、鳥栖あたりやったと思います。」祖父とともに久留米に向かったが、父には逢えないままだった。

父の任地は硫黄島だった。父からの郵便は横須賀郵便局気付で送られてきたが、家族には硫黄島であることが何となくわかっていたという。当時、アメリカ軍の日本本土への長距離爆撃が始まる中、東京から１２５０㎞の距離にある硫黄島は、本土防衛の要として死守すべき島であった。アメリカ軍はより多くの爆弾を搭載し、より安全で効率的な本土爆撃を展開するために飛行場の確保が不可欠であった。日本軍は、陸軍の小笠原兵団長栗林忠道中将を総司令官に、陸軍約１万３７００名、海軍約７５００名の将兵を送り込み、後に太平洋戦争最大の激戦として伝えられる攻防戦がこの島で繰り広げられることになるのである。

硫黄島には福岡県の部隊から約２８００名もの将兵が送り込まれている。長崎県、佐賀県の出身者も含まれているが大半は福岡県出身者である。父の所属は中迫撃砲第二大隊であった。

「親父のところは久留米の二四連隊で、迫撃砲です。部隊長さんが中尾少佐と言いましたけども、その方は佐賀県の出身でした。後で硫黄島の栞で編成を見たら、５４０名くらいが中迫撃砲第二大隊ということでした。中隊が三つに別れておって、第二中隊の中隊長をしておりました親父と同じ所に部隊長がおって、それが栗林中将の陣地のすぐそばです。大坂山という所ですけれども、そこで、総攻撃で亡くなったということです。親父の副官は帰ってきました。あの頃はもう火炎放射器が山の上で、壕から出てきたらすぐ撃たれた。その方たちは、壕の中に入っておって、出られないもんですから、生きていくのが精一杯やったそうです」

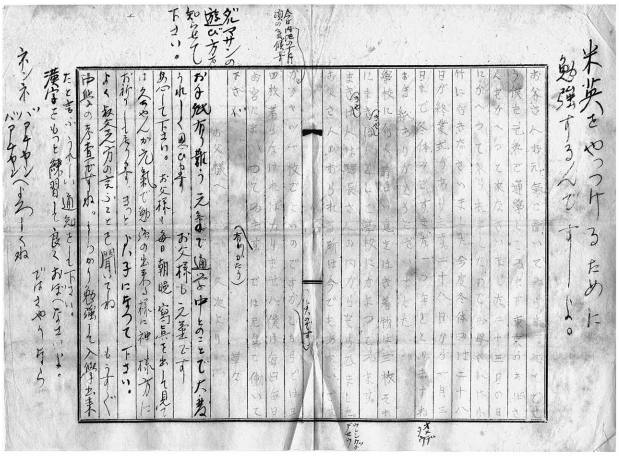
父との手紙のやり取りは昭和20年２月に始まるアメリカ軍上陸の間際まで続いていたという。

「まさか負けるとは思ってませんでした。お袋が長く書けと言いますから、僕ら子供もよく書いておりました。まさか死ぬとは思っておりませんでしたけども、終わりの方の手紙ではもう帰ってこんていうような内容が書いてありました。まさか負けるとは、親父も負けず嫌いでしたから。」

父からの軍事郵便はがきは、農村の収穫風景や市場の風景など家族や子どもを描いたものが使われている（資料３）。三人の子どもたちに宛てた手紙には戦地での奮闘ぶりを伝え、伊藤の怪我や病を案じるなど父親の愛情に溢れている。妻には留守宅を守る労をねぎらい、細かい助言も見られる。伊藤達兄弟三人が出した便箋にびっしりと書き込まれて戻って来た返信もあった（資料４）。

「これが硫黄島からの父の手紙です。もう終わり方でしたから紙もないとですよね、米英をやっつけるためにとか書いてありますけども、僕たちが出した手紙に書き添えて、また向こうから送って来た。最後の手紙が来たのがだいたい２月だったと思います。その手紙で自分は陸軍大尉になるからということでしたけれども、大本営の方にはその通知は行ってなかったらしく、中尉で死んで陸軍大尉ということでした。」

父は、伊藤の中学校合格の知らせを受けたあと、



資料４　伊藤の手紙に上書きされた父からの返信（昭和20年）

資料３　硫黄島の父から送られた軍事郵便（昭和19～20年）

総攻撃に臨み戦死したという。

伊藤はその年の４月、山田中学校に入学した。

「私達の時の山田中学というのはもう、熊ヶ畑に開墾に行く、そして芋を植える、そういうような仕事ばかりで学校で勉強はあまりしてません。」

終戦間際の中学生は学徒勤労動員の毎日だった。福岡大空襲や北九州の空襲の時は碓井の家からも空が真赤になるのが見えたという。

終戦の玉音放送は自宅で聞いた。

「私は、昭和20年の８月15日の玉音放送を聴きました。大事なことがあったらということで、大事をとって自宅で聴きました。その時は中学１年でした。もう悔しかったですね。小学校の時、朝礼があったら、『小さいながらも兵隊だ』と必ず言わされた。まだそれが印象に残ってますね。あの玉音放送を聞いて、なんかこう、あ、こりゃ親父帰って来るやろうか、というのが一番先でした。それからしばらくして、戦死の公報が入ってきましたですね。」

父の戦死を知ったのは終戦後だったが、家族は硫黄島玉砕の報道で覚悟はしていたという。沖縄戦を前にした父の教え子から来たはがきにも『先生の仇を沖縄で』と書かれている。

硫黄島の攻防戦では、日本軍の死傷者２万２８９８人（内、戦死者１万９９００人）、アメリカ軍は日本軍を上回る２万６７２１人（内、戦死者６８２１人）と両軍で５万人に近い死傷者が出ている。戦後、硫黄島はアメリカの占領下に置かれ、昭和43年の小笠原諸島の返還で再び日本の領土となった。現在、島には自衛隊の基地が置かれているが、戦前に約１０００人はいたという島民は帰島できないままである。硫黄島の攻防戦で亡くなった将兵の遺族は、硫黄島協会を作り、毎年島への慰霊巡拝を続けている。伊藤の母も硫黄島協会の仕事には熱心だったという（写真10）。

「遺骨収集が昭和50年くらいから始まりました。おふくろが行ったときは、米軍がばらまいたビラが残っておりました。裏側に観音様があって、硫黄で焼けてこのようになっております。これを、おふくろが遺骨収集に行って貰ってきておりましたので、それを大事に取っておりました。」

アメリカ軍が日本兵の戦意を削いで投降を促すために上空から蒔いた伝単（注５）が戦後30年も経たころまで残っていたという（資料５）。

現在、伊藤は母の遺志を継いで硫黄島協会の仕

写真10　硫黄島全景

資料５　伊藤の母が持ち帰った硫黄島の伝単

事を引き受けている。

「私は、今は硫黄島協会の県の会長もしております。年取られた奥さん方とか、孫の方を優先してできるだけ硫黄島に墓参に行って頂こうと頑張っておるところです。おふくろは、七回ほど遺骨収集に行っております。始めのうちはもう遺骨が溜まったら、木を枠組みしとってそこで燃やす。白骨にしとってそれを持って帰って、厚生労働省の霊安室に置いとって、その遺骨をシベリアとかフイリピンとかから帰ってきた遺骨とまとめて火葬するんです。そして千鳥が淵に持って行って納めるということになっておりました。今は、遺骨収集に行ってもちょっと触ったら壊れるんです。もう骨がですね。

同じ日本の国におりながらまだ遺骨が帰って来てないというのは、まだ半分以上あります。一日も早く、それを返してもらいたいと思って今運動やっておるわけです。」

伊藤をはじめ遺族にとっては戦後70年近くが経過しようとしている今も戦争は終わっていないのかもしれない。

これまで自らの体験を人前で話すことはなかったという三人の体験者は、この講話会を通して改めて戦争体験を次の世代に語り伝えていくことの必要性を感じたという。

政治、経済、外交、宗教といった様々な要素が絡み合って起るのが紛争であり、戦争である。しかし、その影響を受けるのは一人ひとりの人間でありその家族である。伝えなければ伝わらない。未曾有の大戦を体験した国民として、ひとつひとつの体験から見えてくる何かを伝え続ける未来への責務が私たちにはあるのではなかろうか。（敬称略）

（注１）日本と中国が１９３７年（昭和12）から45年まで８年間にわたって展開した戦争で、41年からは第二次世界大戦の戦線の一部となり45年８月15日の日本の敗北で終わった。日中戦争の発端は１９３１年（昭和６）の満洲事変に遡る。

（注２）話者の表現をそのまま記載。日中戦争は、日中両国の宣戦布告のないままに戦闘が始まった為、事変として扱われ、日本では北支事変、後に支那事変と改められた。

（注３）鉄筋コンクリートで造られた防御陣地。

（注４）昭和16年にアメリカ、イギリスなどの連合国との間で勃発した戦争を日本政府は日中戦争も含む大東亜戦争と呼んだ。太平洋戦争はアメリカ側の呼称で戦後、侵略戦争を美化する表現であるとして連合国軍最高司令官総司令部（ＧＨＱ）により使用が禁止され、太平洋戦争に統一された。

（注５）相手国の兵士や国民の戦意喪失を画策して撒かれた宣伝謀略用のビラ。飛行機が発達してから大量に空中から散布された。